

## ポスター発表の要旨

2008年11月2日（日）発表

### ① 井上美代子（現代日本語学講座）

#### 「スウェーデン語母語話者による日本語の音韻的な長さの生成について—CVCVタイプの語を中心に—」

本研究は、スウェーデン語を母語とする日本語学習者（SJ）による、長・短母音および長・短子音の生成について分析したものである。スウェーデン語は、英語、ドイツ語などと同じく強勢拍言語であるとされるが、日本語のように音韻的な長さ（quantity）の対立も持っている。スウェーデン語の quantity は強勢と深い関係があり、長さの対立は強勢音節のみに存在する。強勢音節では、/V:(C)/あるいは/VC:/のように、母音と子音の長短が相補的に現れる。スウェーデン語の引用形には強勢音節が必ず1つ存在することから、引用形として発話した語には長母音あるいは長子音が必ず1つ含まれることになる。日本語では短い音のみで構成された語（/seto/「瀬戸」など）が許容されるが、SJが日本語を発話した場合、特にこうした語に母語による影響が現れることが考えられる。このようなことから本研究では、SJによる日本語の発話において、quantityがどのように実現されるかを分析した。その結果、CVCVタイプの語の半数が、CV:CVまたはCVC:Vとして日本語母語話者（NJ）に知覚された。このような例の持続時間の特徴を分析したところ、C2/V1率はNJと類似していても、絶対値ではNJと特徴が異なるなどの傾向がみられ、スウェーデン語におけるVC連続の相補性による影響が示唆された。

### ② 王 閏梅（比較日本文化学講座）

#### 「梁啓超が見た台湾と日本」

梁啓超は1911（明治44）年の3月に、林猷堂の招待により、友人の湯覚頓、長女の梁令嫻、下女ヨタを伴って、神戸で乗船し、多大な目的を抱えて念願の台湾行きを果たした。しかし、実際の台湾を見学して、その念願と裏腹に、彼はそこでたちまち見事な幻滅を経験した。本発表では、梁啓超の台湾行きが彼の日本認識やその後の政治活動にいかなる変化を及ぼしたかを見てみたい。

梁啓超は1898年10月に戊戌の政変で日本に亡命後、救国を図るため、日本語で書かれた資料を通して各国の経験から近代化の方法を学ぼうとした。もちろん、亡命先の日本に対しては、彼の関心事である経済、財政、行政を始め、社会全般にわたり常に注意を払い、使えそうなものを吸収していたのである。しかし西洋の国々や日本は中国の状況とかなり懸け離れていたた

め、他国にいいものは自国にいいとは限らない。そのような試行錯誤の時期に、日清戦争後日本に割譲された台湾は、1905年以降から国庫補助金を受けない財政的に独立した植民地となった。梁啓超はそれを聞き、大きなインパクトを受けたに違いない。台湾は清に所属していた時には厳しい状況が続いた。ところが、日本領有後わずか10年でこのような成績を上げたのは、いったい何が原因なのか、その方法を究明すれば中国の改革に大きく役立つだろうと彼は考えて、台湾についての情報に一層注目するようになった。しかし、台湾の現実が梁が日本で得た情報とは大きく食い違っていたのはある程度自明なことかもしれない。梁啓超は手紙でこの旅行の動機についてこう述べている。「実は連年こちらにいて新聞雑誌を読むたびに、みな台湾の治績を称えており、愀然としないわけにはいかなかったことにあります。同じ日月、同じ山川でありながら、人の受ける印象はこんなにも違うものでしょうか。しかも数年来、時にあちら（台湾）の一、二遺老と交際が得られました際に、聞くところはまた前と異なるものがあり、自分の目で見なければ、やはりどうして判断できましょうか」。

梁啓超の台湾行きは、彼の人生の中での一マイナス点として、これまでの研究ではほとんど注目されていないのが現状である。しかし、この台湾での幻滅は、梁の日本観に修正を齎し、したがって彼のその後の、とくに民国での執政期に極めて大きな意味を持ったと思われる。

### ③ 許 時嘉（比較日本文化学講座）

#### 「「文明」体験の後—植民地台湾伝統知識人からみた日本の男女交際—」

本発表では、内地観光を経た植民地台湾人紳士が、日本内地の「文明」を体験して帰台後、物質文明追求のために台湾島内に様々な施設を建設する一方で、男女関係と性の区別に対する認識において、台湾に如何なる秩序意識が生じたか、という問題を明らかにする。

1896年台湾総督樺山資紀に招かれ、日本を旅行した李春生は開放的な社会交際と日本の女子教育に育てられた立派な女性像にインパクトを受けたが、平気で入浴客の世話をする女中たちをみて奇妙に感じた。彼から見れば、法律や伝統倫理による外的規範よりも個人意識に基づいた内的規範を重視することは人の陰悪さを知らない「天真爛漫さ」を露呈してしまうことにつながる。李春生は日本旅行中に台湾の女性教育の必要性を痛感した一方、異性との直接的な肉體接触にかかわる場面は一切回避すべきだと主張した。このような秩序意識は1920年代の台湾伝統知識人に継承されている。彼らは女性労働力の養成と教育の重要性を肯定し、女性を家に閉じ込めることを批判したのだが、女性の姿が「男女関係の乱れた」下品な所に現れることに常に神経を尖らせていた。物質的で実業的な文明に開放的な態度を示した植民地初期の知識人は、伝統的な性的意識を最後の牙城として、既成の倫理規範と新たな文明の社会像との距離を調整してきたのである。

#### ④ 呉 恩英（日本語文化学講座）

##### 「在日朝鮮人文学における朝鮮服（チマチョゴリ）の表象」—金石範の作品を中心に—

本発表では、日本において韓国（朝鮮）の民族衣装として女性の「チマ、チョゴリ（スカート、上着）」だけが知られ、また在日朝鮮人文学でも同じ傾向が見られることについて考察した。

1890年代末から朝鮮の洋装化は男性の方が女性より進んでいた。その後、植民地期に入り、朝鮮では色衣が奨励され、日本では内地服化が進んだ。植民地期当初は、日本在住の朝鮮女性は少なかったが、1930年代半ばには40%を超えていた。「内鮮一体」という植民地政策のため、朝鮮服の着用率が男性より高かった女性たちに協和会によるかなり強力な指導が行われた。それにもかかわらず、女性が朝鮮服を着ることができたのは、従来の慣習と儒教思想が根強かったこと、また協和会の指導が不徹底であったことによると考えられる。

このような事情が「朝鮮服」から「チマ・チョゴリ」への呼称の変化にも影響を与えたように見える。女性の朝鮮服は時代の変化とともに他国（日本）を意識したものから祖国を思いおこさせるものになってきたのである。この現象は在日朝鮮人作家、金史良、張赫宙、李恢成、李正子などの作品にも見られるが、金石範の作品ではそれだけに止まらない。彼の作品の主人公は自分自身の民族意識が希薄化するのを認めないながらも、女性の朝鮮服を通して強い民族意識を表わそうとしている。このように日本における朝鮮服（チマ、チョゴリ）の表象はアンビヴァレントな要素が強いといえる。

---

#### ⑤ 齊藤信浩（日本語教育学講座）

##### 「因果関係を表さない接続助詞カラの習得」

Sweetser (1990), ヤコブセン (1990) は複文の従属節は内容領域、認識領域、言語行為領域の3領域に分かれ、言語はこの領域に従って使用されると述べている。

- (1) 原因—結果（内容領域）                      太郎が行くから、誰も来なくなった。
- (2) 根拠—推論（認識領域）                      ここにカバンがあるから、まだ社内にいるだろう。
- (3) 前提—帰結（言語行為領域）                そこにソースがあるから、自由に使ってください。

本研究は英語、中国語、韓国語を母語とする日本語学習者に対し、[前提—帰結]を表す接続助詞カラの表現を中心に、ペーパーによる産出テストと判断テストを行い、その習得過程を調査した。その結果、習得順序は[原因—結果]>[根拠—推論]>[前提—帰結]の順になったが、[原因—結果]と、[根拠—推論][前提—帰結]の間には大きな差があり、この要因は前件の独立性にあると分析した。また、前提条件を表す[前提—帰結]のカラの誤用には条件節との混用が多く見られた。被験者は[根拠—推論]のカラと意味的に近接した条件節と混同しながら、因果関係を表さない[前提—帰結]のカラを習得していくのだと思われる。

---

## ⑥ 坂本麻裕子（比較日本文化学講座）

### 「ヘルバルト教育学の「日本化」と樋口勸次郎」

明治 20(1887)年、東京大学に招かれた教師ハウスクネヒト(Emil Hausknecht)によって紹介されたドイツのヘルバルト教育学は、実践的な教育学として教師の関心を引いた。明治 28(1895)年、『教育報知』にヘルバルト教育学の軸となる道德観が日本には合わないという投稿が多く寄せられるようになる。これを受けて、合わないとする教育関係者と谷本富を始めとする日本のヘルバルト教育学関係者との間で論争が起きるのである。その中で、谷本富や能勢栄、湯原元一らは、ヘルバルト教育学の道德理念を儒教や教育勅語の徳目に置き換え「日本化」しようとするが、逆にヘルバルト教育学の異質性を際立たせてしまう結果となった。

この論争を境に強化された「日本化」の意図を汲む出版物として、樋口勸次郎の『修身童話』を位置付けることができる。『修身童話』は明治 31(1898)年から明治 34(1901)年の間に 9 巻まで出版され、修身教材としてグリム童話と日本昔噺を並べ本文中に徳目をつけている。後半の巻ではグリム童話の徳目の数が減って修身性が薄れていることから、グリム童話を日本の徳目で捉えることができなかつたと言える。つまり、樋口も「日本化」の本質的な問題である道德観の不一致を解決することができなかつた。この『修身童話』の失敗が一因となって、グリム童話は初等教育の教科書から家庭の読み物になっていったと考えられるのである。

---

## ⑦ 全 鍾美（日本語教育方法論講座）

### 「初対面場面における自己開示の日韓対照研究—自己開示の内容による分類を中心に—」

本研究では、初対面場面で初対面の相手に対して自分のことを話すという自己開示に着目した。

調査対象者は日本語母語話者（以下 JJ）の 8 組と、韓国語母語話者（以下 KK）の 8 組である。全員 20 代の女性の大学（院）生で、調査は同性同年齢で実施した。調査時間は 30 分の自由会話と約 15 分のフォローアップ・インタビューである。

会話に出現した自己開示を、情報・事実などの内容の「記述的自己開示」と、感情・評価などの内容の「評価的自己開示」に分類した。その結果、「記述的自己開示」は KK より JJ に、「評価的自己開示」JJ より KK に、より多く出現したことがわかった。

さらに、調査時間を 10 分間隔にわけ、「評価的自己開示」の時間別出現傾向を検討した。JJ は全時間帯にかけて出現頻度と出現率が類似していたが、KK は会話の前半に多く出現する傾向がみられた。

このような自己開示における日韓の相違は、自己開示を行う範囲、プライバシー及び対人関係の形成における意識など、双方の言語文化の慣習の差によるものであることが示唆された。

本研究は20代の同年齢の女性の学生に限定したものである。調査対象者と自己開示の出現との関係を明確にするため、調査の対象を拡大して、データの分析結果を検証する必要がある。さらに、会話分析の手法を用いて、本研究で観察された自己開示の特徴により踏み入って検討することを今後の課題とする。

---

⑧ 鄭 在恩（応用言語学講座）

「韓国人日本語学習者に見られる勧誘のストラテジー——相手（被勧誘者）に躊躇されたあとの「再勧誘」に注目して——」

本研究では、日本語母語話者と韓国語母語話者、韓国人日本語学習者を対象とし、DCT（Discourse Completion Test）を用いて勧誘ストラテジーを分析した。勧誘者は、自らの勧誘に対して相手から「うーん」などやや躊躇するような答え方をされた際に、さらに何と続けるかという設問を与え、回答を書いてもらった。そして、そのデータをもとに、両母語話者間の相違点を明らかにした上で、韓国人日本語学習者に母語からの影響が見られるのか考察を行った。

その結果、日本語母語話者は、誘い続ける場合も相手に押し付けず、相手に判断を任せる発話や間接的な言い方を多く用いることが分かった。一方、韓国語母語話者は、相手の不可欠性に言及し、相手が話にのってくるよう、積極的に相手に関与する発話が多く見られた。韓国人日本語学習者は、相手に躊躇する理由を尋ねる発話や相手の不可欠性に言及する発話が多く見られた。また、勧誘を諦める際は、相手の「資質のフェイス」と「立場のフェイス」を侵害するような発話がやや見られた。このような発話は、仲良しだからこそ、冗談やきついことも言えるという韓国人の考え方の反映であり、母語からの影響が見られたと考えられる。

---

⑨ 田 云明（比較日本文化学講座）

「白楽天詩文の受容から見る日本の隠逸」

中国において隠逸の概念は、はやくも『論語』にあらわれ、魏晋以降、老荘思想や仏教思想の影響を受けて形成された。隠逸思想は中国国内のみならず、漢詩文の伝来にともなって日本にも齎され、とりわけ平安末期から中世初期にかけて人々の間に広く流布した。

本研究は、中日両国の隠逸思想それぞれの形成過程を探り、両者の文化的影響関係の諸相を究明するものである。具体的には、主に日本文学・思想に多大な影響を与えた白楽天の「中隠」、「閑適」といった隠逸思想の受容に焦点を当てて考察を試みる。

はじめに、中国における隠逸について、まず、『論語』・『荘子』に見られる隠逸の基準、要素と形態の比較を通して、両者の隠逸の相違を把握する。次に、竹林七賢や陶淵明などを通

して、魏晋南北朝の隠逸思想のあり方を考察する。さらに、「中隠」詩、「閑適」詩を通して、白楽天の隠逸思想を具体的に分析する。

続いて、日本における隠逸について、まず、六朝の詩風を大いに受け入れた『懷風藻』、三大勅撰漢詩集に描かれた観念的隠逸を考察する。次に、平安中期から平安末期にかけて、主に菅原道真、前中書王、慶滋保胤の漢詩文を通して、白楽天漢詩文および彼の「中隠」思想の受容を考察する。

以上を踏まえた上で、日本中世の隠逸代表である西行、鴨長明らの文学及び文学観から、日本独自の隠逸の特徴を分析し、中国で生まれた隠逸思想が、日本でどのような変容を遂げたかを明らかにする。

#### ⑩ 東 会娟（日本語教育方法論講座）

##### 「中国人上級日本語学習者の縮約形の習得状況—学習環境の影響を中心に—」

縮約形に関するこれまでの研究には、日本語母語話者の縮約形の使用状況を調べたものは多いが、学習者の縮約形の習得状況に目を向けたものはまだ少なく、学習環境が縮約形の習得に与える影響についても触れられていない。本研究では、日本語学習者の縮約形の習得状況と縮約形の習得への学習環境の影響を調べることを目的とする。そこで、日本語母語話者、中国で外国語として日本語を勉強している上級日本語学習者（JFL）と日本で第2言語として日本語を勉強している中国人上級日本語学習者（JSL）各30名を対象に、6つの縮約形（「じゃ」「てる」「んだ」「きゃ」「ちゃう」「とく」）について、ODCT（Oral discourse completion task）を用いて調査を行った。調査の結果は含意スケール（Implicational scaling）を用いてまとめた。含意スケールから、縮約形項目別に見ても個々の学習者別に見ても、JFLはJSLより縮約形の習得が遅れていることが明らかになった。学習環境、すなわち中国で学習するか日本で学習するかによって、縮約形の習得に差が生じていることが確認された。しかし、JFLもJSLも日本語母語話者に比べると、縮約形の使用率の低いことが判明し、日本語学習者は上級になっても縮約形の習得がまだ不十分であることが示唆された。学習環境のほか、指導の欠如や母語の影響が原因だと考えられる。

#### ⑪ 野田大志（現代日本語学講座）

##### 「現代日本語の複合動詞における構文的多義ネットワーク」

現代日本語の複合動詞は従来、様々な理論的枠組みのもとで精力的に研究がなされてきている。多くの先行研究において複合動詞は構成要素間の意味的・統語的な関係性から複数のグループに分類されているものの、複数のグループ間の相互関係を分析、記述している先行研究は管見の限りでは見当たらない。また、複合動詞一語の意味を捉える上で、厳密には構成要素そ

それぞれの意味のみからは導かれない意味（例えば、先行研究において記述されている「様態」や「手段」などといった、構成要素間の関係性に相当する意味）の出所、位置づけが明確になされている先行研究も管見の限りでは見当たらない。

そこで、これらの問題点を解決すべく、本発表ではほぼ全てのタイプの複合動詞をゲシュタルト的な複合体、すなわち認知的な構文理論における構文（construction）であると位置づけた分析を提示した。具体的に、個々の複合動詞の詳細な意味分析を行った上でそこから複数の構文的意味をボトムアップ的に抽出し、これらの相互関係及び拡張の動機づけについて、構文スキーマの抽出（メタファー）・概念メタファー・プロファイルシフト（メトニミー）・主体化をはじめとした多角的な観点から検討した。そして、ほぼ全てのタイプの複合動詞における構文的多義ネットワークを提示することで、複合動詞の意味形成の全貌を包括的に扱うことができるということを示した。

---

## ⑫ 野呂健一（現代日本語学講座）

### 「現代日本語の同一動詞反復表現について」

現代日本語には、以下の例のように、同一文中で同じ動詞を繰り返す様々な表現がある。

- (1) 待ちに待った夏休みがやってきた。
- (2) 洗っても洗っても汚れが落ちない。
- (3) サラリーマンが汗を拭き拭き歩いていた。
- (4) 山田さんと会うには会ったが、込み入った話はできなかった。
- (5) 部下の意見を聞くだけ聞くが、何も対応してくれなかった。

これらの表現はいずれも、構成要素の意味の総和から全体の意味を厳密には予測できないが、「足を洗う」「油を売る」のような慣用句と異なり、繰り返される動詞の部分がある程度自由に入れ替えることができる。構文文法 (Fillmore et al 1988, Goldberg1995 など) からのアプローチに従い、空所を含んだパターン全体に慣習的意味が結びついた表現であると考えることが適当である。

それぞれの表現が独自の慣習的意味と結びつく一方で、動詞の繰り返しという形式に共通する特徴も見られる。「VにV」「VでもVでも」及び連用形の反復は、いずれも動詞の反復によって、当該事態が相当期間に渡って継続したり、相当回数反復したりすることを表しており、形式と意味との間の類似性すなわち類像性の現れである。一方、「VにはV」「VだけV」には、当該事態の実現の仕方が典型的なものではないという共通点があり、カテゴリーの成員の帰属度が段階的、すなわち、中心的成員から周辺の成員まで存在することを踏まえている。

---

## ⑬ 村田香恵（日本語教育方法論講座）

### 「トピックの異なる意見文にみられる文章構造の特徴」

日本留学試験「記述問題」(以下、記述問題)は、言語の形式にかかる能力及び論理を構築する能力を測定することを目的とし、2つのトピックからどちらか一方を選択するトピック選択式問題である。これまでトピックは文法的能力よりも論理的能力により影響を及ぼすことが指摘されている(廣瀬 2008)。しかしどのように影響しているのかについてはあまり研究されていない。そこで本研究は文章構造に焦点をあて、トピックが文章構造にどのような影響を与えるのか、文章構造の特徴を検証する。

記述問題に用いられた異なる2つのトピックで書かれた意見文73本を対象とし、文章の言語形式と内容に基づき分類した「主張、根拠、反論、結論」の配列をトピック間で比較した。その結果、どちらのトピックにおいても「主張-根拠-結論」の両活型が最も多く、文章の型の違いはみられなかった。これは、記述問題の問題形式や字数、制限時間を考慮すると両活型が適しているということが影響しているからである。しかし一方のトピックでは「反論」が効果的に用いられていた。これは一方のトピックのみ、問題文に反論を促す指示があったため、問題形式による影響だと考えられる。

この結果から、意見文の文章構造は、問題文の指示に影響をうけるが、トピックにはあまり影響されないということが明らかとなった。今後は、同一の学習者が、同一の問題形式による異なるトピックで書いた意見文の文章構造を比較し分析する必要がある。

### ⑭ 頼 玉菁 (比較日本文化学講座)

#### 「江戸武士の「衆道」について—戦国末期から江戸前期を中心に—」

本発表は、日本で布教活動を行ったルイス・フロイス(1532~1597)が著した『日本史』、及びオランダ商館長として勤めていたフランソワ・カロン(1600~1705)の『日本大王国志』、さらに享保四年(1719)に朝鮮通信使に製述官として日本に随行してきた申維翰(ミンユハン)の『海游録』などの文献を資料として、外国人である彼らが、武家社会で一般的に行われていた「衆道」をどのように見ていたのかを分析し、それらの視点を通して、戦国末期から江戸前期にかけての「衆道」の様相を考察するものである。

武家社会の「衆道」は寺院の風習から発展し、その後独自の規律性を築き上げた。そこから主君と家臣の衆道が一般化したとされる。戦国時代において戦術や軍隊の団結を強化する役割だった「衆道」は、江戸時代になると、武士の精神と結びついた「衆道」の掟や構造が発足し、一般庶民層にも広まったのである。

なお、当時衆道と継嗣を儲けることは別問題として認識されていたことがカロンの『日本大王国志』からうかがえる。そのことから、主君として衆道に深く傾倒すれば継承問題に影響を

及ぼすため、その問題さえなければ、武家社会で「衆道」が容認されていたと考えることができる。

---

⑮ 李 宛儒（日本語文化学講座）

「日本植民地での演劇、植民地演劇の中の日本」

本発表では、皇民化運動期（1936～1945）の台湾における演劇の変化を中心に考察し、台湾演劇の発展史でどう位置付けるかを検討することを目的としている。研究の視点は「加害者対被害者」という図式に陥ることを避けるため、「統治者対被統治者」という観点ではなく、ピーター・ドウスが「想像の帝国—東アジアにおける日本」（『帝国という幻想』青木書店、1998年）で提示した「政府」も「民衆」も「日本帝国主義」という文化現象の「参与者」という観点に基づいて分析を進めたい。

1942年4月の台湾演劇協会の発足を境に、皇民化運動期の演劇政策の変化を見る。前期は、日本の南進策を背景に海軍大将として台湾総督に着任した小林躋造が行なった皇民化運動により、台湾の伝統演劇は初めて全面禁止となった。この政策に反対がなかったのは、近代化の故に伝統演劇（特に大衆向けの「歌仔戲」）を禁止する意見が台湾人の有識者の中で存在したため、演劇の「皇民化」がすぐに政府民間の通念となったからである。しかし、温存されてきた伝統演劇をいかに現代生活を表現する健全娯楽に改善するのか、またどのような新しい台湾演劇が作り上げるのかという問題が存在し、後期の台湾演劇協会の役割はそれらの問題を解決し植民地台湾で新しい「国民劇」を作ることにあった。

---

⑯ 呂 雷寧（応用言語学講座）

「日本語の無意志自動詞表現について—中国語との対照を通じて—」

中国語を母語とする日本語学習者には、「無意志自動詞+（ら）れる／ことができる」を過剰に使用する傾向が見られる。本研究では次のことを明らかにした。

無意志自動詞表現には、無意志的な状態変化を表す性質（静態動詞の場合を除く）と、認識上の可能性を表すモダリティの性質があることが示された。また、有対か無対か、意図的働きが潜在するか否かにかかわらず、中国語の可能表現と対応する傾向が観察できたことにより、可能の意味を含意できるという無意志自動詞表現のもう一つの性質が示唆された。

日本語の無意志自動詞表現と中国語の可能表現に見られる対応関係から、日中両言語には次の相違点がうかがえる。1) 日本語の可能表現が意志性に関わり、無意志的な状態変化を表しにくいのに対して、中国語のそれは意志性による制約がほとんど見られない。2) 日本語には、自他対応を成した動詞が多く存在し、動作と変化のいずれを表すかという役割分担が割合明確である。それに対して、中国語では自他両用の動詞がほとんどで、動作と変化のいずれにも同一

の動詞が用いられることが多い。3) 無意志自動詞表現はモダリティの性格を有し、認識可能を表すことができる。一方、中国語の場合、近未来の事柄に対する話者の推測を表すには、可能の形式が用いられることが多い。

#### ⑩ 大和祐子（日本語教育学講座）

##### 「課題解決場面会話における「分かりにくさ」に関する一考察—話者性という観点から—」

課題解決場面の会話は、日本語学習者（以下、NNS）にとっては「話し合いがいつ合意に至ったか分からない」など、この種の会話に「分かりにくさ」を感じるものが少なくない。そこで、本発表では Goffman (1981) の「参与の枠組み」を援用し、課題解決場面会話の観察を通して、その会話にみられる「分かりにくさ」の一要因となるものを検討した。

その結果、課題解決場面会話の話者性に起因する「分かりにくさ」があることがわかった。まず、Goffman のいう話し手・聞き手については、特に話し合いが多人数で行われている場合、①聞き手が必ずしも「話しかけられている聞き手」であるとは限らないこと、②話し手は複数の聞き手を発話の受け手とすることがあることなどが会話の流れを分かりにくくさせていると考えられる。

また、発話の受け手となった会話参加者が、話し手になるための準備として、「反応機会場」（西阪 2007）において聞き手行動を行うことで「話しかけられている聞き手」であることを主張することが必要である。しかし、NNS の中には多人数の会話であることにより、自分以外の聞き手がいづちを打てばいいと考え、この種の会話で「はい」「うん」をほとんど用いないことなどが NNS への半構造化インタビューを通して分かった。

#### ⑩ 楊 韜（ヨーロッパ言語文化講座）

##### 「『上海』における日本像（1913—1945）」

『上海』は、1913年から1945年まで上海で発行された日本語雑誌である。総合雑誌としての『上海』では、上海で居留している日本人を対象に、国際情勢から、当地の物価変動などの日常生活情報まで、様々な記事が掲載している。本発表は、雑誌『上海』の記事や広告を考察することを通して、20世紀前半の国際都市上海における日本像を描く試みである。

本発表において、主に三つの角度から『上海』における日本像を考察する。まず、中国では20世紀40年代まで、数多くの日本語雑誌や新聞は存在していた。これらの日本語メディアはどのような目的で作られてきたのか。代表的な日本語雑誌『上海』の創刊経緯を辿ることによって、その目的を明らかにする。次に、1920年代以降、様々な人種が共に暮らす国際都市上海では、日本人は外国人総人口の割合の中で最も大きく占め、虹口地域を中心とした日本人居留地を作り上げた。上海で暮らす日本人の生活風景は、どのようなものであったか。雑誌『上海』

の記事と広告を分析することで、その様子を覗くことができる。最後に、『上海』は1910年代以来のおおよそ30年間にわたり、上海、そして中国に対する観察を続けていた。読者対象の設定や中国国内の状況とリンクさせる報道方針によって、同時期の日本国内のメディアと異なる報道内容はあったと思われる。日本国内のメディアと違い、『上海』における日本像はどのような独自性、さらにどのような異文化的要素があったのかを考える。

---